

## 2001 年度学習院大学史学会総会

### 第 17 回学習院大学史学会大会

期日：2001 年 6 月 2 日(土)

会場：学習院創立百周年記念会館

#### ●プログラム：

・史学会総会 10:00～11:30 【小講堂】

・研究報告

第 1 部 12:30～12:00

#### 【第 1 会議室】

「井伊直政家臣団の形成と徳川家中での位置付け」

学習院大学大学院博士後期課程 小宮山 敏和氏

#### 【第 3 会議室】

「カボジュ暴動」一パリの食肉業者と都市計画一」

学習院大学大学院博士後期課程 岡田 尚文氏

第 2 部 13:00～14:00

#### 【第 1 会議室】

「律令官人の考課と「考状」

学習院大学大学院博士後期課程 田原 光泰氏

#### 【第 3 会議室】

「五胡十六国時代の関中平野における牧畜と民族」

学習院大学大学院博士後期課程 市来 弘志氏

・史学科 40 周年を祝う会

【正堂・小講堂】 15:30～16:30

記念講演：学習院大学創立百周年記念会館正堂

学習院大学学長 小倉 芳彦氏

17:00～19:00

・懇親会 【小講堂】

●研究報告要旨：

「井伊直政家臣団の形成と徳川家中での位置付け」

小宮山 敏和氏

本報告は、現時点では以下のような内容を想定している。

最初に報告の目的としては、徳川家康の家臣として活躍し、近世期においては譜代大名の筆頭と目された井伊家の初代である直政に着目し、その家臣団編成を通じて戦国期から近世期にかけての徳川家中における家康の権力確立過程を考察することを目的とする。

元々三河に基盤を持ち、徳川家の伸長とともに成長した三河武士と異なり、遠江に基盤を持ち、一度は今川氏によって滅亡されかけた井伊氏が、家康のもとで後に譜代の筆頭とまで目されるようになる背景には、家康による井伊家家臣団の編成という側面が要因の一つとして考えられる。今回の報告では、この家康による井伊直政家臣団の編成という側面を中心に考察し、徳川家中における井伊家の位置づけを考えてみたい。

## 「カボシュ暴動」ーパリの食肉業者と都市計画ー

岡田 尚文氏

1413年、パリにおいて、いわゆる「カボシュ暴動」が発生した。この事件は従来、主に政治史的側面から語られることが多かった。つまり、オルレアン党派対ブルゴーニュ党派という、王家・諸侯を巻き込んだ政治的対立の中での一出来事と捉えられてきたのである。しかし、「カボシュ暴動」は中世末期のパリで一大勢力を誇った食肉業者たちと、それを都市計画の点から規制しようとする王家官僚たちとの争いでもあった。同時代資料を元に、当該事件のもう一つの側面を検証する。

## 「律令官人の考課と「考状」

田原 光泰氏

律令官人の考課については、野村忠夫氏が体系的に論じられ、評価の幅の規格性とその一貫性が通説となっている。それについて寺崎保広氏は考課関係木簡などの検討により、奈良時代前期には実態に即した厳しい評価が行われていたことを確認された。重要な指摘ではあるが、考課方法に関する理解については多少の疑問がある。また、考課に際し、「考文」を補助する文書として「考状」が存在し、それが実際に官人の考課に一定の役割を持ったことが諸氏により指摘されている。しかし「考状」は実例がないため不明な部分が多い。そこでこの「考状」をあらためて考察することにし、それによって、上記の問題点を含め、奈良時代における官人考課のあり方について再検討したい。

## 「五胡十六国時代の関中平野における牧畜と民族」

市来 弘志氏

関中平野は西晋時代から人口の半分近くがテイ(氏の下に一)・羌等の遊牧系諸民族に占められ、五胡十六国時代には北方及び西方からさらに大量の移住があり、人口の相当部分が非漢族であった。関中平野の五胡諸政権の中には前秦のように農業を振興したものもあったが、気候の寒冷化に伴い農業牧畜境界線が南下し、農業条件が悪化したため、五胡十六国時代を通じ関中の農業は不振だった。これに対し、農業人口の減少した関中平野は、当時豊かな森林が広がり、牧畜に適した条件を備えていた。五世紀華北に成立した農法が遊牧民の強い影響を受けていることは既に指摘されており、当時農民と牧畜民が共存するのは常態だった。また碑文等の研究から、漢族と非漢族が雑居あるいは隣接居住する地域が多かったことが解っている。これらのことから、当時関中平野では牧畜が重要な産業となっており、漢代や唐代とは全く異なる社会環境を形成していたことを明らかにしたい。